

同志社良心館ラーニング・コモンズ揺籃期の一年： アカデミック・インストラクターの視座を通して

岡 部 晋 典 ・ 鈴 木 夕 佳

1. はじめに

同志社大学の図書館人として著名な小野則秋（1906-1987）は、「昌平坂學問所文庫の研究（下）」においてこのように書いている。

昌平黌の教育組織は寄宿寮、書生寮、通學生の三部に分かれ、寄宿寮は旗本家人を收容して飲食其他一切の経費を官費を以て支辨し…（略）…昌平黌が旗本家人の教育を第一義として立學された關係上、書生寮は付隨的なもので食費は一切自辯で纔に學費の一部のみ補助された。かうした關係から諸事寄宿寮に比して自由の風が強く學問的にも相當活氣があり、談論風發の趣をもつて、寄宿に入るべき資格のものもわざ／＼その資格を捨てゝ一浪人として書生寮に這入るものもあつた程で幕末の志士等もこの寮から出たものが多い。（p.154）

小野の文章からは、幕末、昌平黌（昌平坂学問所のこと）では協同の学びが多く行われていたことが記されている。近年の読書研究でも、「会読」つまり皆で読み合うというキーワードが注目されている。例えば、前田は『江戸の読書会：会読の思想史』のなかで、藩校や寺子屋などのなかで、協同で学び、議論しあう読書の方法が盛んであったと論じている。前田はカイヨワの遊び論を援用しつつ、我が国では過去、学習空間というフラットな場において、身分制度から遊離しながら議論を行うことが盛んに行われていたと指摘する。なお、前田はその会読の習慣が下火になったことの要因として、西洋の教授法の導入や、明治時代の学問が立身出世に直結し、遊び性が喪失したことと考察している。

現在の図書館のイメージは、静謐性を求められるものが一般的であろう。無論、小布施町のまちとしょテラソといった、「倉庫学から脱却する」との主張のもと、賑わいと図書館をセットで結びつけている図書館も、数少ないながら現れつつあるものの、その

数は依然として少ない。

しかし、共に学ぶ、実際に皆で手を動かすという方法は、筆者ら自身の経験を鑑みても有効であると考えられる。また、ラーニング・コモンズ常連の学生の一人が漏らした「一人でしんどい課題をやるのはしんどい。でもみんなでしんどい課題をやるのは楽しい」という言葉は、なかなか大学生の学びの実態の一部をうまく言い表しているようにも思われる。

とくに近年、効果的な学習／修方法としてアクティブ・ラーニングという手法が注目を集めている。例えば平成24年8月の中教審の答申、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」、通称「大学教育の質的転換」においては

生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見だしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である。すなわち個々の学生の認知的、倫理的、社会的能力を引き出し、それを鍛えるディスカッションやディベートといった双方向の講義、演習、実験、実習や実技等を中心とした授業への転換によって、学生の主体的な学修を促す質の高い学士課程教育を進めることが求められる。

と述べられている。

本学ラーニング・コモンズは正課の時間外学習の充実すなわち単位の実質化をはかることを目的としつつ、学びの共有地となるよう設計されている。以降、どのような仕器を設置したのか、どのような人的支援を行っているかといった、開室1年目の状況等のスナップショットを記していく。

2. 良心館ラーニング・コモンズのしつらえ

2013年4月、同志社大学は今出川キャンパスの「良心館」2、3階に、約2,550平方メートルのラーニング・コモンズ（以下、良心館LCと記す）を設立した。ここは、来れば自然と勉強したくなるような「知的欲望開発空間」をコンセプトに、学生同士で語り合い、触発しあいながら学習できる空間づくりがなされている。

まず、全体の特徴の一つとして、良心館LC内には各エリアを仕切る壁がほとんどな

く、学生同士、お互いの学習状況が見えるようになっている点が挙げられる。壁がないことで適度なざわめきがフロアを包み、活気ある空間を構成している。また、コモンズ内にある様々な什器、ホワイトボードは移動性・可変性を重視しており、学びの形態によって自由に移動・組み換えができる。このような環境の中で、学生たちは自分たちの学びやすいように学習空間をアレンジすることが可能である。

次に、それぞれのエリアの概略について述べる。まず、2階は学びの交流と相互啓発をコンセプトに「クリエイティブ・コモンズ」と称され、「プレゼンテーションコート」、「インフォダイナー」、「グローバルビレッジ」、「グループワークエリア」の4つのエリアで構成されている。大規模な講演会やワークショップが可能な「プレゼンテーションコート」は、通常のプレゼンテーションの他、天井の格子状のフレームからパネルを吊るし、ポスターセッションもできるしつらえになっている。秋にはこの特徴を生かし、プロジェクト科目の成果報告会が行われた。また、一見、ファミリーレストランの様な作りとなっている「インフォダイナー」では、各テーブルに備えられた短焦点プロジェクターを用い、PC画面を映しながら議論が可能である。留学生と本学学生の交流の場である「グローバルビレッジ」では、定期的にカフェイベントが行われている。カフェイベントとは、学内外の研究者と学生がお茶を飲みながら話をする催しであり、大学の講義とは異なった空気感で研究者の知見と学生の知見を往復させることが可能である。グループで手軽に催しができる「グループワークエリア」には可動式の畳の台座があり、お茶や華道、あるいは京都ならではの、僧侶によるワークショップ等にも対応可能となっている。

3階はアカデミックスキルの育成空間をコンセプトに「リサーチ・コモンズ」と称され、「グループスタディールーム」、「ワークショップルーム」、「プリントステーション」、「マルチメディアラウンジ」、「アカデミックサポートエリア」の5つのエリアで構成されている。電子黒板とホワイトボードを備える「グループスタディールーム」は、7部屋あるものの部屋同士は独立しておらず、ゆるやかな仕切りとして糸状のストリングカーテンが設置されている。これは他の部屋でのディスカッションの盛り上がりや、隣の部屋の議論の触発を仕掛けるデザインである。「ワークショップルーム」にはクローズドタイプとオープンタイプがあり、前者はクロマキー処理も可能な簡易スタジオ、後者は外光の入る開放的な講習室となっている。「プリントステーション」では、書類のコピーはもちろん、大型ポスターの印刷や文集の作成にも対応可能となっている。ここには著作権やデザインのアドバイスをくれるスタッフも常駐している。「マルチメディアラウンジ」では、プレゼンのための映像編集や画像編集などができる。そして、「アカデミックサポートエリア」では専門のスタッフが常駐し、学習にまつわる様々な相談を受け付けている。このエリアのサポート内容については次章で詳しく述べる。

以上のように、良心館 LC は、仲間と集まって学ぶ場所であるにとどまらず、講演会や報告会の実施、専門スタッフへの学習相談、プレゼンや映像の編集、文集やポスターの印刷など、学習に関する一連の流れを総べた「学びのオアシス」のような場所となっている。

3. 学習支援の人的体制

良心館 LC には、多方面から学生をサポートするために様々な役割を持つスタッフが存在している。まず、アカデミックサポートエリアには、3名のアカデミック・インストラクター（教員）、1名の情報探索アシスタント（図書館員）、合計14名雇用したラーニング・アシスタント（院生スタッフ）のうち2名が交代で常駐している。学習にまつわる様々な相談がここに持ち込まれ、スタッフは連携しつつ対応にあたる。

アカデミックサポートエリアでの学習支援の特徴は、主に二つある。第一に、この場所がいわゆる「ライティングセンター」ではないという点である。ここでは相談内容を限定せず、学習に関するあらゆる相談を受け付けている。内容は、レポート作成に関するものをはじめ、本の読み方、文献の探し方、プレゼンのチェックなど多岐にわたる。もちろん、我々では対応しきれない専門的な相談をもちかけられる場合もある。その際は担当教員に確認することを勧めるが、そのような場合のアポイントメントの取り方、失礼でないメールの送り方、オフィスアワーの調べ方など教えることも多い。このように大学での学習活動にまつわる幅広い相談に対応可能な場として機能している。

第二に、持ち込まれる相談に対し、複数人のスタッフが同時に話を聞き、アドバイスをするチームティーチングを基本としている点である。相談者とスタッフがそれぞれ一対二、あるいは一対三となって話を聞くことは、場合によっては相談者に圧迫感を与えるおそれも考えられるが、このエリアの開放的な作りや什器の配置によって、真正面から向き合う「面接」的な形でなく、スタッフの輪の中に自然に相談者が入り、気軽に話ができる形となっている。学生にとって教員、図書館員、大学院生など様々な立場の人間からアドバイスを聞くことは、多面的な視点を得るという点で有意義であると考えている。

加えて、スタッフ同士の研鑽という点でも、このチームティーチング体制は有効である。自分とは異なる切り口のアドバイスを聞くことで新たな知識を得たり、他のスタッフの傾聴の仕方や話し方から、自身の対応スタイルを振り返る良い機会を得たりすることが可能となる。筆者（鈴木）自身、図書館員と共に対応することで、レファレンスではこういうことまで教えてもらえるのかと新たに知ったことも多かった。

良心館 LC には以上のスタッフの他にも、留学相談に対応する留学コーディネーター、

同志社良心館ラーニング・コモンズ揺籃期の一年：アカデミック・インストラクターの視座を通して

電子黒板やプロジェクターなどの学習機器の使い方をサポートする学習支援コーディネーター、またパソコン関係のサポートにあたる学生スタッフなどが存在し、様々な立場から学生の学びをサポートしている。

4. 学習支援の実際

前述のような人的支援のなかで我々はどのような学習支援を実態として行っているか、より詳細に紹介する。前述の通り、良心館 LC 3F のアカデミックサポートエリアには3名の教員、1名の図書館員、常時2名の大学院生スタッフが常駐しており、日々、さまざまな学習相談が行われている。

溝上らが2010年7月に行った日本の4年制大学の大学図書館（n=755）を対象にした調査研究では、ラーニング・コモンズを設置している大学図書館は16%に過ぎず、また3割の大学図書館は「学生スタッフがいない」、4割強の大学図書館は「学習支援に学生スタッフは関与していない」と回答、さらには情報技術関連部門との連携も39%に過ぎないと報告している。これらをまとめて溝上は「厳しい見方をすれば、日本のラーニング・コモンズは、学生にとって居心地のいい物理的空間にとどまっているという見方も可能になる」と述べている。

しかし良心館 LC では、設備と同時に人的支援にも力を注いだため日々バリエーションに富んだ質問が寄せられている。良心館 LC で行われる学習相談について、筆者（岡部）はこれを「レファレンスの少し先」と称している。他大学のライティングセンター等は、相談受付件数データそのものがほとんど公開されていないので比較は困難であるが、他大学の先生で、ラーニング・コモンズを運営している方々からの談話によると本学の学習相談件数はきわめて多いと言えそうである。データについては6.各種データにて記す。

学習支援を大学のなかで図書館員自身が正面切って行うという理路を説得的に述べることはやや困難であると考えられる。教員でもないのになぜ図書館員が学習支援を行うのだという疑問や批判は、事実、ウェブ上でも散見される。さらには、レファレンスの原則の「宿題の直接回答を禁止する」が、図書館員自身による学習支援を行うことの困難の一因とも考えられる。このような困難があるものの、レポート執筆講座を行っている図書館はいくつか認めることができる。これは専門の部署が存在しないがゆえに自らがその責務を果たさざるを得ないという状況もあろう。また、初年次導入教育が上手く機能していない場合、図書館がその業務を行わざるを得ないという面もあろう。

しかし、良心館 LC では専門の教員がサポートする、また院生スタッフについても全10コマの研修を受けたものである、という前提をもってして、学習支援の理路を作って

いる。無論、スタッフにはそれぞれの専門があり、専門外の指導は可能なのかという疑問もあろう。しかし、相談者の領域に対し、対応者が専門外、いわば外様であり、前提知識のコンテキストを共有しないからこそ、相談者の悩みや、外部に対して伝わりにくい箇所を指摘しやすいという面を指摘しておきたい。

これらのスタッフのもと、初年度の学生からはレポートとは何かという、高校における小論文と大学のレポートの求められる質の間隙を埋める相談が多く寄せられる。また、高年次になると卒論のテーマ設定など、なかなか高度な相談も寄せられる。中には、3回生のグループで論文コンテストに出場したいのだが、論文を書いたことがないため最初から教えて欲しいというケースもあった。学年的な問題でゼミが始まっていない、また相談する人がまわりにもいないという、以前は不可視化されていたニーズを私たちにによって埋めることができたことを喜ばしく考えている。

5. 開催しているセミナー

アカデミックサポートエリアの教員は、講義を担当しないという特殊な勤務体系で働いている。その代わり、コンスタントにエリアに在駐することで、適宜寄せられる質問に対応するという勤務形態である。また、アカデミックスキルを育成させるための各種セミナーの講師を担当している。春学期は、期末対策セミナーと称して、7月3日から12日にかけて今出川・京田辺の両校地で合計12コマ開催した。内容はレジユメの作り方、プレゼンの構成法など基礎的なアカデミックスキルを基本としたが、中には、単純なセミナーにならないよう工夫した「アイデアの拡張法」というセミナーも設定した。これはそれぞれ筆者らがマインドマップを使った教育経験があり、また情報検索に関する講義を持っていた経験を活かし、紙媒体およびコンピュータを用いてレポート作成等に活かせるブレインストーミング法を紹介するものである。最初、鈴木がマインドマップを用いて、テーマからさまざまなキーワードを連想する方法を教え、その後、岡部がリッテルナビ⁽¹⁾を用いて、関連キーワードを見つけていく…というセミナーである。これらのセミナーでは、かならず手を動かすワークの時間を作ることで、従来のいわゆる「知識注入型」セミナーではない学修スタイルを構築した。またその際には、協調学習的な話し合いの場を作ることで、他の受講生の像を通して、自分の意見の優位性や欠点をあきらかにすることを狙った。

秋学期からは、セミナーの連続開講を狙い、10月から12月の間、月曜から金曜まで必ず何かしらのセミナーを開催した。内容も精査を行い、春学期と同様のセミナーに加え、ソーシャルメディアを用いて、SNSなどでフォローすることで半自動的に情報収集を行うようなセミナーも設計し、好評を得た。セミナー後に回収したアンケートの結果で

同志社良心館ラーニング・コモンズ揺籃期の一年：アカデミック・インストラクターの視座を通して

は、約7割の学生が「期待以上の満足度だった」、約9割が「とても役立った」と回答している。

また、秋学期からは図書館との連携も射程距離に入れたセミナーを開催した。これまでの図書館セミナーは往々にして知識注入型セミナーであるが、図書館の情報検索セミナーを応用して、これを協調学習型ワークショップとしてデザインしなおし、セミナーとして提供した。協調学習の手法としてはジグソーメソッドを用いた。複数人からなるグループ内に、それぞれ担当者ごとに使用する検索システムを割り当てた。割り当てられた学生は、その特定のデータベースや検索システムの操作に習熟することが求められる。そして、最終的にはそれぞれの知見を持ち合い、ジグソーパズルのように各個人が学んだことのピースをはめ込み総合的な学びを行う、言い換えれば一人で学ぶより効率的な学び方のワークショップという試行を行った。このワークショップデザインは、依頼した社会学部の教員からも好評をもって迎えられ、連続的なセミナーとして設計する予定である。

6. 各種データ

良心館 LC においてはいくつかの統計を取る仕組みが整えられている。とくに、筆者らは入退館データおよび学習相談の統計を主として分析している。

入退館ゲートは IC カードにより、入退館の時間および入館者の属性を取得している。通常の図書館の場合、入館データは取得しても、退館データを取っていないことが多い。しかし、良心館 LC では入退館両方のデータを取得することにより、結果として滞在時間を取得することを可能としている。書式はタブ区切りテキストである。1日で1万行程度増加するものであり、一年間でおおよそ1GB弱のデータが取得されると推定される。現在、滞在時間を含めた詳細なデータ分析を進めている。

現在のところ、講義開講期間中は、平日平均して2500名～3500名、テスト前では4000名程度の入館者が認められる。土曜日は700名～1000名程度、日曜日は300～500名程度の入館者数で推移している。

学習相談の統計については、かなり詳細に記録を残している。チームティーチングで学習支援にあたるという方針であるため、繰り返し来訪する学生であっても他の教員、院生スタッフと情報共有する必要があるからである。どのように学生の学びが進歩したかということも含めてモニタリングするために、詳細な情報を記録している。この点は、大抵の図書館が利用者から受け付けた相談について、個人情報を含めて残すことを嫌うことと対照的といえるかもしれない。

相談内容のカテゴリおよび受付件数は以下のとおりである（2013年4月～2014年1月

17日執筆時現在)。なお、延べ受付人数は627名である。

相談が複数の内容に亘る場合であれば、複数の番号を取得し、分析している。基本的な傾向としては、実施初年度、春学期ではレポートの書き方がきわめて多かった。秋学期になるとレポートの書き方は相変わらず多いものの、プレゼンテーションを見てもらいたいという相談が多く寄せられるようになっている。

以下は、学年ごとに受け付けた学習相談を図にしたものである（同：2013年4月～2014年1月17日執筆時現在）。「不明」については、相談後、すぐに立ち去る学生が一定数存在するためである。

tab.1 学習相談受付件数

レポートの書き方	415
文献の調べ方	86
文献の読み方	33
調査、研究の方法	32
プレゼンテーションの方法	86
勉強会・ワールドカフェの開催	17
語学の勉強	19
特定の科目の学び方	54
自分にあった勉強法	12
留学について	1
成績について	0
進学・就職など卒業後の進路	22
学業上の悩み・不安	4
その他	170

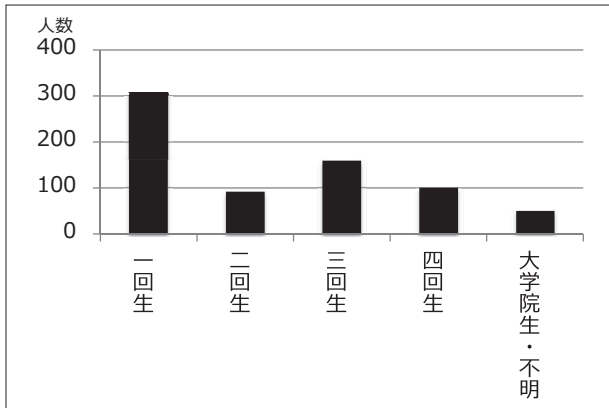


fig. 1 学年別学習相談受付人数

この表から分かる通り、一回生がもっとも相談を寄せるものの、それに次ぐ学年が三回生であるというのはなかなか示唆に富む。実際の相談内容とつきあわせると、一回生はレポートの書き方が多いものの、三回生では、ゼミが始まったため、テーマの設定方法を知りたい、といった相談や、プレゼンテーションのコツを教えて欲しいという相談

がしばしば寄せられる。日々の業務のなかで、学習進度によって相談内容が高度化することは実感するところである。大学初年度教育から、場合によってはかなり高度な相談まで寄せられるラーニング・コモンズでは複数人によるチームティーチングがやはり有効であろう。

なお、単純な入館者数については、春学期と比較し秋学期は減少が認められる。この原因について調査を行っているが、おおよそのところ、初年次教育とくに協調学習を行う科目が春学期に多く設定されていることが原因と考えられる。

7. 問題点と今後のまとめ

本稿は良心館 LC 開室 1 年目の揺籃期に執筆された。それゆえ、どのような什器が良心館 LC に設置されているか、またどのような学習相談等を受け付けているかといったスナップショットに留まっている。さらに、本稿では紙幅の都合等で、ラーニング・コモンズの思想を語られる際にしばしば言及される協調学習やアフォーダンスといった議論には踏み込んでいない。ともあれ、これらの概念も念頭に置きつつ、良心館 LC が設計されているということは念のため触れておきたい。また、統計についても、様々な分析角度から分析を進めているものの、今回公表できたのはごく一部に留まっている。ただし、入退館ゲートのログをもとに、平均およびピークの滞在時間の分析や、あるいは入館者のうち、どのような学部・学年が入館しているかといったデータも分析できつつある。加えて、学部・学年別傾向と付き合わせるために、良心館 LC の設置されている今出川校地で開講している講義の協調学習度等をシラバスより分析するといったことも行っており、次年度以降は統計データを多面的に分析し、利用の実態分析を行い、また IR (Institutional Research) の一助としていきたい。

【註】

- (1) 株式会社ネクストの提供する、新しいタイプの情報探索支援ツール。図書館分類体系と Wikipedia 他を組み合わせて単語の関係性を提示することで、新たなキーワードを発見することが可能なサービス

【参考文献】

- 小野則秋 (1942) 「昌平坂學問所文庫の研究 (下)」、『昌平坂學問所文庫の研究 図書館論叢 第一集、第二集抜刷』、pp.154-177.
- 中央教育審議会 (2012) 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申)」 〈http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm〉 2014年1月30日閲覧
- 前田勉 (2012) 『江戸の読書会：会読の思想史』、平凡社。
- 溝上智恵子 (2013) 「ラーニング・コモンズ：海外からの示唆」、『IDE：現代の高等教育』556号、pp.38-43.

(おかべ ゆきのり・すずき ゆうか。

同志社大学 学習支援・教育開発センター アカデミック・インストラクター)